

# 令和6年度 産業建設常任委員会 行政視察 復命書

## 1. 視察日程等

- (1) 日 程 令和 6年 6月 25日 (火) ～ 27日 (木)
- (2) 視 察 先 愛知県、岐阜県
- (3) 視察目的 中部国際空港フライトパーク現地視察について、岐阜県関ヶ原古戦場記念館の現地視察について、Moovi とこなめ・コミュニティーパーク Gruun 現地視察について、常滑市役所に掲示された「やきもののまち常滑」を象徴した陶壁について、自治会主催エリアマネジメント「7町・広域連合会」について
- (4) 参 加 者 宮原委員長、渡部副委員長、山崎委員、五十嵐委員、仲山委員、山口委員、吉谷委員

## 2. 視察結果

- (1) 愛知県常滑市 中部国際空港フライトパーク現地視察について

- 日 時： 令和 6年 6月 25日 (火) 11時 00分～12時 00分
- 対応者： 中部国際空港株式会社 執行役員 筒井 薫生 様  
地域共生部部长 渡辺 吉章 様  
地域共生部主査 高田 浩司 様  
地域共生部 後藤 かおり 様  
営業推進部 田中 克実 様
- 視察内容：別紙1のとおり

- (2) 岐阜県関ヶ原町 岐阜県関ヶ原古戦場記念館の現地視察について

- 日 時： 令和 6年 6月 25日 (火) 14時 00分～16時 00分
- 対応者： 関ヶ原古戦場記念 副館長 梅本 雅史 様  
企画課 小竹 喜也 様  
関ヶ原町古戦場活用推進課課長補佐 富田 真一郎 様
- 視察内容：別紙2のとおり

- (3) 愛知県常滑市 Moovi とこなめ・コミュニティーパーク Gruun 現地視察について

- 日 時： 令和 6年 6月 26日 (水) 10時 00分～11時 30分
- 対応者： 常滑市議会 議長 加藤 久豊 様  
常滑市ボートレース事業局 管理者 宮島 基弘 様  
局次長 柴田 恭郎 様  
経営企画課長 山下 剛司 様  
開催運営課課長 中野 玄介 様
- 視察内容：別紙3のとおり

(4) 愛知県常滑市 常滑市役所に掲示された「やきもののまち常滑」を象徴した陶壁について

■ 日 時： 令和 6年 6月 26日 (水) 14時 00分～16時 00分

■ 対応者： 常滑市議会事務局 局長 竹内 裕人 様

議事課 瀬木 健太 様

常滑市総務部施設マネジメント課 主任 岸田 直樹 様

■ 視察内容：別紙4のとおり

(5) 愛知県岡崎市 自治会主催エリアマネジメント「7町・広域連合会」について

■ 日 時： 令和 6年 6月 27日 (木) 9時 15分～11時 15分

■ 対応者： 一般社団法人岡崎市観光協会 代表理事 靱井 泰晴 様

7町・広域連合会次世代の会 副代表 柏木 克友 様

株式会社まちづくり岡崎 佐谷 繫 様

■ 視察内容：別紙5のとおり

(別紙1)

## 1. 愛知県常滑市 中部国際空港フライトパーク現地視察について

### (1) フライトパークの説明主旨

中部国際空港のフライトパークである「フライド・オブ・ドリームズ」は、航空ファンや家族連れに航空機や空港運営に関する知識と体験を提供するために設けられた施設であり、2018年10月に開業。

施設の見玉として、ボーイング787ドリームライナーの初号機が展示されており、飛行機を囲むようにレストランやキッズパークなどが併設されている。飛行機のすぐ横にはエンジン見学台が新設され、飛行機の動力を間近に見ることが可能。また、滑走路のマーキングを再現した床面を通じて、飛行機のスケールの大きさや迫力を体感できるようになっている。

2021年12月23日にリニューアルオープンし、現在は787の開発の歴史や先進技術について学べる展示もあり、航空業界に関わる企業が提供した部品や素材の展示も行われている。フライトパークの目的は、訪れる人々に航空産業への興味や憧れを持ってもらうことであり、子どもたちが航空産業に触れ、学び、夢を持つことを支援することにも重点を置いているとのこと。

### (2) 主な質疑応答

1. 建設計画当時から注目を浴びていた施設ですが、中部地域の航空産業のさらなる発展に寄与する施設であると思います。フライトパーク建設に至るまでの背景（苦労話など）や現時点までの事業効果について伺います。
  - 経緯はボーイング787の35%をセントレア中部地域で製造されており、787の部品製造・輸送の円滑化へ協力してきました。その様な背景から787の初号機を寄贈されました。出来上がった飛行機を展示するため、建物の中にいかに飛行機を入れるかということで苦労しました。事業効果については、コロナ禍を経て無料施設に転換をし、フライトパークを目的に来ていただける方が増えた。全天候型の大きな公園みたいな感じになり、年間で130万人強くらいの方が施設に入ってきていて、フライトパークには70万人以上の方がご入場いただいている。セントレア空港に飛行機に乗らなくても来ていただける施設になっていると思っている。
2. 施設の年間入場者数や運営経費についてお聞かせください。
  - 2023年度は139万人の来場者数であった。運営経費について回答は差し控える。

3. 同施設の観光目的以外の活用としてはどのようなものがありますでしょうか。
  - 飲食施設としての役割を担っていることと、貸し切りのホールとしての機能もある。地元小中学校や他自治体からの修学旅行にも利用いただいている。
  
4. 同施設において、常滑市の二十歳のつどいを開催しておりますが、開催に至った経緯、開催時の来場者の反応や今後に向けた課題がありましたらご教示ください。
  - 常滑市からの依頼があった。常滑市の若者が地元から世界に羽ばたくようにとのコンセプトから同施設での開催に至ったと主催者からは聞いている。アンケート結果ではおおむね満足いただけたとのことであり、次年度も二十歳のつどいの会場となる予定である。
  
5. フライトパークでは、館内の空間を利用したショーやシアトル航空博物館ワークショップ、また多くの体験型コンテンツがあり、一日中楽しめそうな空間と感じますが、来客世代の統計、来客数の曜日ごとの平均値、地元民と観光客の割合などを伺います。
  - 来客世代は比較的若い家族層が多い。
  - 平日(5日)：休日(土日)の入場割合→1：1
  - 地元客：観光客→2：1
  
6. シアトルテラスでは、日本初出店の飲食店もたくさん出店しているようですが、誘致の背景と、空港内のレストラン街との差別化などの考えについて伺います。
  - 当初ボーイングの創業のまちであるシアトルをイメージした出店誘致をしたが、コロナ禍を経て店舗の入れ替えもあった。ヤングファミリー層をターゲットとしており、現在は地元食材などを使ったメニューなどを提供できる店が出店している。
  
7. フライト・オブ・ドリームズが稼働してからの空港利用客の変化、特に旅行目的ではなく空港利用を目的にした来客数の変化はどのようなものかを伺います。
  - アンケート調査したが、空港来場者400万人のうち50万人がフライト・オブ・ドリームズを目的に訪れていることがわかったことから、当施設が開業した影響は大きいと感じる。
  
8. フライトパークは以前ボーイング787も展示してあった様ですがリニューアル後はどの様にグレードアップされたのでしょうか。また以前は有料施設で大人1,200円、子供800円としリニューアル後は一部を除き無料になったようですが維持運営に経費が係ると思いますが、どの様に維持されているのでしょうか。
  - コロナ禍を経て、有料施設として来客数を維持することが難しくなったことから無

料化した。現在はコロナ禍前の約8割まで来客数が戻ってきている。運営については出店テナントからの賃料で維持ができていく状況。

### (3) 委員の所見・感想

#### ■宮原委員長

ボーイング誕生の地であるシアトルをモチーフにしたレストラン店舗を誘致し、ボーイングの象徴ともいえる787機の展示、更には子供向けの無料施設の開放等によって、空港が移動するためだけの施設ではないという新たな魅力を作り出した施設となる。

新千歳空港との共通点としては映画館、温泉などがあることとなるが、決定的に異なる点として、フライト・オブ・ドリームズの特にフライトパークの存在となる。これを運営するにあたり、建設時の財政的な面はもちろんスペースの確保、また維持管理などの運営面などにおいても、相当な苦労があったことと予想していたが、コロナ禍からの回復も含め想像以上の取組があったことを知ることができた。

ユニークな取組として、結婚式や成人式、学校の社会見学での活用も推進しているとのことであり、空港の更なる活性化としては新千歳空港でも活かせるアイデアなのかもしれないと感じたものの、同時に移動以外の目的で人を呼び込むための目玉としては何があればいいのかと考えた次第である。

新千歳空港の民間委託後の動向として「空港が果たす役割」という点でも、この先十分に意見交換する必要性もあるのではと考えさせられた視察研修となった。

#### ■渡部副委員長

中部国際空港に隣接するフライトパークは、航空ファンや家族連れにとって魅力的なスポットである。当該施設は、ボーイング787初号機の展示を中心に、航空に関する学びと遊びを融合させた体験型デジタルコンテンツで構成されている。飛行機の操縦席の展示や、エンジンを手の届く距離で観覧することができる展示台など、航空機の迫力と技術を間近で感じることができる。

当該施設の特徴として、子どもたちが楽しめるキッズエリアがあり無料で遊べる大型のネット遊具などが充実している。平日から親子連れが訪れており、雨天の日などは来客数も増える傾向にあるとのこと。確かに、公園ほどの広さがあることから、全天候型のこのエリアは子ども連れの親にとっては喜ばしい場所であると感じた。

地域連携という点では、常滑市の成人式や結婚式にも利用されており市民にも好評を得ているとのことから、空港所在地である本市においてもこのような取り組みは、市民に空港をより身近に感じてもらうために有効ではと考える。

## ■山崎委員

先ずは実際に屋内商業施設の中にボーイング787初号機が展示してあり驚かされ、その初号機の直近周辺には親子で楽しめる無料の遊び場が有り、また2階～3階では初号機を間近に見ながら食事やショッピングも楽しめる作りとなっており感動させられました。

千歳も空港開港100周年を迎えるにあたりこれだけのスケールとまでは行かなくても地元地域に貢献できる様な企画が出来ないものかと考えさせられた研修であった。

## ■五十嵐委員

空港に付随する施設として海外の有名空港に引けを取らない立派な施設でした。数年前に当市では退役する政府専用機を市の遺産として残せないか提案したことがあります。費用的に非常に困難でしたしよく理解しております。その経緯からすると只々羨ましい限りです。

## ■山口委員

- ・ 個人的には家族や観光議連なども含め十数回訪れている施設であり、大変魅力的な施設である。
- ・ 本施設は実際の飛行機が格納され間近で拝見でき、大変迫力もあり話題性のある施設である。
- ・ 飛行機内部の見学や、キッズスペースの開設と無料化、多くの撮影スポットや空港の歴史や飛行機機材が多く展示されており、素晴らしい観光スポットであると感じる。
- ・ 飲食ブースも洗練されており、家族連れやカップルなどの利用も多く見込まれるし、活用もされていた。
- ・ 有料ではあるがフライトシュミレーター等、ここにしか無いオンリーワンも備えているのも強みの一つと考える（羽田空港周辺の航空会社所有のシュミレーターは一般的では無いとの意味である）。
- ・ また、ユニークベニューとしての活用も行うなども大変面白い取り組みと考える。また、この仕組みは広告宣伝効果及び費用対効果が非常に高い取り組みの一つと考える。
- ・ 本市も北の空の玄関口として長くその地位を築いてきているが、道内外からの更なる来訪者の獲得や、市内への観光客の回遊性の向上に向けた一案として、又、更に空のまち千歳を印象付ける為にも有効な手法と考える。
- ・ 新千歳空港周辺にはまだまだ未利用の土地もあることから、又、空港開港100年を迎えるにあたり空港と共に発展してきた本市の新たなシンボルチックな施設としてHAP や道、自衛隊と連携して、北海一号機のレプリカや千歳らしく自衛隊機なども合わせた施設が出来る事は、マチの更なる魅力作りとなると感じた。

## ■仲山委員

フライトパークは建設計画当時から注目を浴びていた施設であります。今回初めて視察させていただき航空産業が発展していくためには必要な施設であると感じました。完成された大きな飛行機の実機をそのまま誘客施設へと事業化された発想にも凄く感動しますし、飛行機を建物の中へ展示することで風水などによる劣化を軽減でき、長期間きれいな状態で見の人を楽しませてくれる施設であり、さらに同じ空間に多くの遊具を設置したキッズが楽しく過ごせる施設づくりをされ感心しました。また、施設内の商業施設や飲食ブースなどは、ボーイングの創業の町シアトルのお店をたくさん誘致し、おしゃれな空間で、小さな子供さんから高齢な方までが満足できる施設となっていて、幅広い世代に利用される施設と感じるとともに航空産業の発展と人材育成にも大きく寄与する施設であると思います。千歳市も空港を抱えるまちとして、今回視察で得たことなどを活かせるよう取組んでいきたい。

## ■吉谷委員

中部国際空港は、ボーイング機の建造場でもあったことから航空機部品やボーイング7871号機そのものを活用した大胆な展示ができ、そのつながりでシアトル系ブランドの参入がしやすかった背景がある(このことは事前質問の回答で語られたもの)。そうした下地がない新千歳空港で同様の展示や商業エリア展開が可能かと言われると、率直に難しいと理解する。このことから、空港発展や活用をする場合別路線方向を目指す方が良くと体感できるに至ったのは良くも悪くも学びになったと言える。

その他、空港からフライトパークまでの移動が長いのと完全屋内移動順路でないため、外の暑さにあてられる状況が移動中発生する。現地の移動踏まえ、最も近隣住民や利用者の多い駐車場からフライトパークまでの順路を調査できる時間があれば、利用者にもっと快適な空間の提供ができるヒントになるのではなかっただろうかと振り返って感じたため、この点まで機転が回らず不十分調査となってしまったことが個人的にはあるが後悔が残った。

中部国際空港自体は過去何度か視察含め訪れているが、それでも新たな見識を得て、空港利活用に対する知見を増やす、別角度からの考察が湧くというものであったので、視察での収穫は大きいものであったと思う。

(別紙2)

## 2. 岐阜県関ヶ原町 岐阜県関ヶ原古戦場記念館の現地視察について

### (1) 岐阜県関ヶ原古戦場記念館概要と説明主旨

岐阜県に位置する関ヶ原古戦場記念館は、歴史的に重要な関ヶ原の戦いに焦点を当てた施設である。開館に至る経緯として、関ヶ原の戦いのブランド力が活かされていない、一般の観光客が楽しめる設備や工夫に欠けているとの地域課題があったことから、平成27年3月に「関ヶ原古戦場ランドデザイン」が策定され、地域の魅力づくりや受け入れ環境整備の推進が図られた。令和2年10月21日に開業した当該記念館は、戦いの全容を理解するための最新技術を駆使した体験型の展示が特徴で、訪れる人々に東西両軍の激突を体感させる大迫力のシアターや、貴重なコレクションを展示している。また、関ヶ原の戦いに関連する貴重な史料や、戦国時代の武具、出土品、書簡などが展示されており、歴史に興味のある人々にとっては見逃せない場所であり、施設は5階建、最上階には360度の全面ガラス張りの展望室があり、関ヶ原古戦場を一望できる。

#### ■開館日・利用料金など

- ・開館時間 9:30~17:00(入館は16:30まで)
- ・休館日/毎週月曜日(祝日の場合は翌平日)、12/29~1/3
- ・利用料金

区分	通常時	団体(20名以上)	年間パスポート
一般	500円	400円	1,200円
高校生・大学生	300円	240円	800円
中学生以下	無料	無料	—

### (2) 主な質疑応答

1. 戦国時代の大きな歴史がある地域として、その歴史を活用し後世へ伝えるために建設され多くの観光客が訪れていると思います。2020年の開館以降の入場者数、周辺にある戦国武将観光スポットを巡る広域周遊観光促進による、地域活性化への効果について伺います。また、具体的にどのような取組をされているのか、また、オーバーツーリズムなどの課題は発生していないのか伺います。
  - コロナ禍での開館ではあったが、入館者数は順調に推移している(資料有り)。特に令和5年度については、新型コロナウイルス感染症の5類移行があったことやNHKの大河ドラマ「どうする家康」の放送が重なったことで、大変多くのお客様にお越しいただいた。大河ドラマも放送終了となり反動減を心配していたが、今のところ前年度と同程度で推移をしている。広域周遊観光の促進による地域活性化への

効果については、コロナ禍の影響もあり、数値的な把握は難しい部分もありますが、地元自治体から開館後は、体感的に観光客が増えたということを実感していると聞いている。また、具体的な取組としましては、スタンプラリー等実施し、他の戦国武将観光地を巡っていただくような取組のほか、秋には県と町が連携した大規模な祭りイベントを実施し多くのお客様にお越しいただいている。オーバーツーリズムについては、今のところ問題になるようなことは生じていないが、先ほどの秋のお祭り際には、大変多くのお客様が車でお越しになるため、駐車場確保や周辺の交通渋滞ということはその日に限ってある。

2. 大河ドラマの放映による同施設への影響はどのようなものがあったか。当時、PR において、県や周辺自治体とはどのような連携などを図ったか。
  - ▶ 大きな効果があった。特に関ヶ原合戦の回放送直後の土日は1日あたりの入場者数記録を大きく更新したほか、テレビ雑誌等での紹介機会が増え、知名度アップにつながった。県や周辺自治体との連携については、静岡市、浜松市、岡崎市にある大河ドラマ館と連携し、相互PRやお互いのチケットを持参した場合の入館料の割引を行っている。
3. コロナ禍での開館であったとのことですが、当時は来館者を増やすためにどのような工夫を行いましたでしょうか。
  - ▶ なかなか増やすことが難しい状況であったが、徹底した感染防止対策に努めた。観覧ブースの定員を半数に抑えて、座席も間隔を設けるなどの取り組みをした。現在は通常時のオペレーションに戻った。
4. 記念館オープン以前となる2018年7月に結成した「おもてなし連合」が関ヶ原古戦場設立に深く関係していると思われませんが、詳細について伺います。
  - ▶ 当初は、観光協会や商工会、既存のボランティア団体がバラバラに動いていたため、16団体で設置し、全体で連携して観光客のおもてなしをすることとした。現在も定例会等を行って連携を図っている。
5. 古戦場が観光地として大きな財産となっていると思いますが、歴史ある地域として周辺自治体との連携などもあるのかどうかを伺います。
  - ▶ 関ヶ原町としては、岡崎市と徳川家康ゆかりの地として昭和58年から協定を結んでいる。最近時であると滋賀県長浜市と一昨年度に連携を始めた。岐阜県では戦国武将観光連絡協議会があり連携を図っている。

6. 記念館は2020年オープンから4年目となりますが、入場数の統計と町の観光入込客数への影響について伺います。

- 令和3年で23万人、令和4年で34万人、令和5年は49万人と、記念館の入場者数と共に増加傾向にある。

7. 関ヶ原研究会は2020年の記念館オープンから3年後の2023年10月の設立となりますが、設立に至る経緯と役割をお伺いします。

- 関ヶ原に関連する研究状況の発信や若手研究者の支援等を通じて関ヶ原研究を促進し、調査研究フィールドや観光地としての関ヶ原古戦場への魅力を高めるために2023年10月14日付で設立。関ヶ原関連研究に関する情報発信や、若手研究者の育成、学芸員ネットワークの形成に資する各活動を行っており、会員数は71名となっている。

(以下8～11は一括にて質疑応答)

8. イベントについては、期間や内容をどのようにして考えておられるか伺います。

9. 海外との連携を行おうと思った発想についてと連携における効果について伺います。

10. イベントを多く開催しているが、頻度や地域連携について。

11. イベント開催における集客効果はどのようなになっているか？

- 秋の行楽シーズンである9月15日が合戦の日を始まりとし、10月中旬までに毎週土日にイベントを行っている。狼煙をあげるイベント、ウォーキングイベントなど、期間中は県や町で連携を図ってイベント開催を行っている。まちとの連携では、おもてなし連合にイベント開催の協力をいただいている。記念館においても当該期間では秋の企画展を行っており、来訪者にとって見応えのある展示などの取り組みを行なっている。秋のイベント期間中で、昨年度実績で、記念館では4万6千人の来場者があり、町には10万人の来訪者数があった。  
海外との連携においては、関ヶ原を海外に発信するため、古戦場を有する海外の自治体と連携協定を進めている。海外派遣を含む職員交流を行ってきた経緯があり、コロナの影響により中断していたが、今年度から再開に向けて動いている。

12. リピーターに関してですが、施設見学とイベント参加におけるリピーター率の違いや、リピーターに特化した施策について伺います。

- 来場者のうち10%がリピーターであるとのデータがある。リピーターに特化した施策はないが、リピーターのなかでは10回以上来場している方もおり、傾向としては、企画展等を目的に再度来場している方がいるとの認識。

13. 同施設の維持管理について、①管理体制②収益について（補助額含む）伺います。

- 受付監視、設備保守、清掃業務を外部委託している、管理予算は年間3億2900万円、入館料の収益は令和5年度で8590万。

### (3) 委員の所見・感想

#### ■宮原委員長

令和2年に開館ということで建物自体が新しくきれいであったが、こだわりである外観コンセプトに示す通り、そのスケール感と充実した設備内容に想像以上の驚きがあった。

開館のきっかけは、関ヶ原古戦場としての歴史があるにもかかわらず、それを町の魅力づくりとしてブランディングできていなかったことではあるが、まちづくりを冷静に見直した上で、関ヶ原古戦場を観光とまちづくりのメインにおいたその判断力が功を奏したものと感じた。さらには、県と、おもてなし連合と呼ばれる16の諸団体連合の団結力が大きな力になったことと思われる。記念館の入場数と町の観光入込数が比例しているのはその証であろう。

施設内を実際に体験したが、階ごとに別々の違うコンテンツで時系列を追うように関ヶ原合戦までの歴史が紹介される形は期待感を増幅させる。グランドビジョン、シアターで流れる映像は、見事な出来栄であった。まるで映画館で取り入れている4DXに近い体験ができることに驚きを覚えた。展示室や戦国時代の武器などに触れることができる体験コーナー、360度の視界で現在と当時の陣跡を見比べることができる展望室など、日本の重要な歴史を臨場感あふれる中で学べる施設として、歴史好きな人はもちろん、あらゆる世代にも飽きさせないものと感じた。記念館でリピーターを期待することは簡単なことではないが、関ヶ原古戦場記念館に関してはその課題もさほどハードルが高いものではないのではと思うほどであった。

岐阜県との共同運営の施設であり、また周辺自治体との協定やPR協力等で連携を密にしていることも、歴史施設としての重層感に繋がっているものと感じた。千歳市にこの規模の施設が作れるかは別問題としても、そこに至る姿勢や体制に非常に興味を持った視察となった。

#### ■渡部副委員長

関ヶ原古戦場記念館は、関ヶ原の戦いに関する展示や体験型施設を通じて、地域の文化的価値を強化すると同時に、観光振興に貢献している。

本記念館は、最新技術を駆使した東西両軍の激突を体感できるシアターを見た後に各展示ブースに入っていく手法をとっており、来場者に関ヶ原合戦がどのようなものだったか理解しやすい導入方法が特徴的であった。また、甲冑などの展示物についてはほぼレプリカとのことであるが、関ヶ原合戦に関わった武将すべての甲冑が展示されて

おり、実際に甲冑や刀などに触れることもでき、展示方法によって非常に見ごたえのあるものであった。

本記念館は地元経済への影響も大きく、記念館の存在は周辺の飲食店などの利用にも繋がり地域の雇用創出にも寄与している。さらに、教育プログラムやワークショップを通じて、地域住民や子どもたちに歴史を学ぶ機会を提供し、次世代への知識伝承の場ともなっていることから、本記念館は歴史的な価値を伝えるだけでなく、地域の活性化と持続可能な発展を促進する重要な役割を果たしていると考えます。

駅から記念館までの沿道には、関ヶ原合戦についてのパネルなどが設置されており、景観づくりにも寄与していると感じたが、それらの整備費については県からの補助金などが活用されているとのことであり、まちづくりの財源の活用方法についても学ぶものがあつた。

### ■山崎委員

やはり地方行政のトップである県庁が真剣に取り組み、県の発展に県内各自治体と一緒に取り組んでいる様にした。道庁も上から目線で上辺の仕事をするのでは無く道内各自治体の発展のために真剣に取り組んで欲しいと感じた。特に今回の国の施策でも有るラピダスの件に関しては北海道の命運を掛けていると言っても過言ではない事業なのに積極性もスピード感も何も感じない。

### ■五十嵐委員

正直、当市にとって直接参考になる施設ではないと思う。これは県の事業だが、収益性・採算面での懸念をもろともせず設置された事は一市民として不安と驚きである。但し日本の歴史的に非常に価値の高い出来事（関ヶ原合戦）が当地において観光資源として未開発だったことにも驚きました。

県内外を問わず、戦国時代に作られたお城が近隣に沢山あるので、町単位でこの古戦場の観光資源開発が困難だったのも致し方ないが、その歴史的価値を考えると残念な期間が長すぎた。

市町村都道府県、基礎自治体と広域行政、更に国単位での歴史的価値の捉え方に違いが生じるのは理解するが、せっきやく出来たので今後は地域をあげて大切な施設を活かし、価値の見直しに取り組んで頂きたいと感じました。

## ■山口委員

- ・ 施設は県レベルで建設がされており、かなり立派な施設であった。
- ・ アクセスに関しては、車での移動がメインに想定されており、電車を含む公共の移動手段ではアクセスが悪い印象である。実際に近隣の区市町村からの利用が多いのと、貸し切りの大型バスによる利用者が多いようだ。学習や研修施設としては問題ないが、観光施設と捉えると一考しなければならないと感じる。
- ・ 関ヶ原の合戦という、教科書にも出てくる素材を活用しているので、多くの方に対し認知度は高く優位性を感じる一方、本市の持つ世界遺産群と比較して、施設のあり方や運営方法については本市で取り組むには現実的ではないと感じた。
- ・ 施設外においては、各陣営が配置されていた何もない場所にも幟等を立てて周遊出来る環境作りは、面白いと感じる。本市のもつ世界遺産群は範囲が狭いため、参考とまではならないが、あまり目立たない地形などをクローズアップさせる手法としては考える機会となった。
- ・ 施設内にあるお土産コーナーや飲食ブースは、滞在時間を延ばし、更に関連グッズやお土産品は、当該施設の印象を強め、情報の2次発信へ繋がるものとして、必要なものとする。本市でも公式グッズを販売する企業やお土産品の販売、飲食ブースの運営が出来る企業の発掘と、施設整備を進めるべきと感じた。また、人材の育成や確保も大きな課題であったが、これは日本全国同じ課題でもある。

## ■仲山委員

「関ヶ原の戦い」という歴史は幾度となく聞いてきたが、今視察において現地視察でき日本の戦国時代の歴史を深めることができたと感じています。岐阜県が運営主体となり取組まれている観光事業であり施設の充実度はかなり高いと感じ、観光立国を目指す上で必要な施設の一つではないかと考えます。特に施設内のグラウンド・ビジョンによる東西陣営の戦いの勢力映像・解説は非常に解りやすく工夫を感じ、隣接されるシアターでは戦いの臨場感を強く与える演出がされ自身がその地に居るような見せ方を体験し感心した。この様なその地にしかないブランドを活かし広域での観光事業に結びつける戦略で経済効果を上げる取組は重要と思います。千歳市も2021年に「北海道・北東北の縄文遺跡群」の一つとして世界文化遺産登録された「キウス周堤墓群」をはじめ多くの文化遺産や観光名所があるが、まだまだ多くの観光客を誘客するには、保存も含め誘客に繋がる施策充実が重要と考えられ観光事業振興について考えていきたい。

## ■吉谷委員

縄文、擦文までの遺跡遺物は多いが、近代の郷土歴史文献や歴史関連物が少ない千歳市において、近代のことを後世に伝える学びの在り方、博物施設の在り方、街の関わり方に関する方向性を示す施設の視察になったと思われる。

現代技術を駆使した映像展示も、効果的且つ魅力的に文化を見せる点で有効な手法だと感じた。

駅から記念館まで距離が近いこともあるが、施設までの導線の中で関わった武将の紹介やイラストパネルを設置して案内されていたことは非常にわかりやすく、街も一体となって盛り上げようとする姿勢が感じられ取り組みとして良いものであった。

展示レイアウト、博物館展示で有名な丹青社の名前も資料から聞け、考古学・博物館を学んだ身として懐かしさも覚えた一方、縁の品に関して入手難しい状況も垣間見え、物が少ないなりの運営苦難も理解する視察であった。

(別紙3)

### 3. Mooovi とこなめ、コミュニティーパーク Gruun の現地視察について

#### (1) 説明主旨

Mooovi (モービィ) とこなめ、コミュニティーパーク Gruun は、競艇場「ボートレースとこなめ」に隣接した施設であり、2021年11月にオープン。

Mooovi とこなめは、ボートレースを眺めながら親子で楽しめる屋外エリアと屋内エリアにて構成されており、6ヶ月から12歳までの子どもが、室内外で様々なアクティビティを楽しむことができる。屋外エリアは、水場や砂場があるほか、高さ9メートルの巨大遊具が設置されており、子どもの年齢に合わせて楽しめる設備となっている。屋内エリアでは、知育玩具を使用した遊び場が提供されており、子供たちが想像力と創造力を育むことができる。

Gruun とこなめは、多世代が交流できるコミュニティーパークであり、子どもから高齢者まで幅広い年代の人々が集い、様々な活動を通じて交流を深めることができる場所として設計されている。パーク内には、アウトドアフィットネスエリア、ヨガスタジオ、ランニングコースがあり、健康的なライフスタイルを促進するための施設が充実しており、また、芝生広場ではピクニックを楽しんだり、リラックスしたりすることができる。管理棟を兼ねたパークセンターでは、公園の情報やイベントの案内があり、トイレや更衣室、ロッカー、休憩スペースも完備。さらに、サッカーボールなどのスポーツ用具の無料貸し出しサービスもある。

#### ■Mooovi とこなめ・Gruun とこなめ 施設概要

施設名称	Mooovi とこなめ	Gruun とこなめ
施設内容	屋内外遊具	屋内施設～多目的スタジオ パークセンター 屋外施設～芝生広場 ボールフィールドなど
利用対象年齢	6か月～12歳	年齢制限なし
営業時間	10:10～16:30	夏季(2月～10月) 8:30～17:30 冬季(10月～2月) 8:30～17:00
利用料金	子ども 300円 大人 300円(レース開催日は レース場への本入場料含む)	無料

## (2) 主な質疑応答

1. ボートレース場に隣接する公園ということで、地域産業でもあるモーターボート競技の活性化にもつながる施設運営と考えます。地域への事業効果をお聞きします。
  - 年々ボートレース場スタンドへの来場者が減少傾向にある中、Moovvi を整備したことにより、隣接するスタンドへもファミリー層の来場者が増えています。なお、Moovvi 利用料金の 300 円は、スタンド入場料を含んでおり、行き来が可能となっております。Gruun は小さいお子様から高齢の方まで多世代が交流できる拠点として地域の皆さんにご利用いただいております。具体例をあげますと、屋外エリアでは、「とこフェス」として開催する「とこマルシェ」や「パルクールワークシヨツプ」、サッカースクール等の定期イベントを実施しています。屋内では、スタジオでの運動プログラムのほか、クリスマスツリーやしめ縄づくり、害初め体験や豆まきなど季節ごとのイベントも実施しております。また、普段 Gruun を利用されている方が企画・実施する、地域のファミリー層を対象とした体験・参加型イベントや運動会イベントも実施されています。また、近隣の小中学生が学校終わりに立ち寄るなど、地域の方の新しい居場所としての役割も担っています。
  
2. 今事業によりモーターボート競技がこれまで以上に市民へ身近なものとなっていくことが予測されますが、事業継承・繁栄へ競技者の養成やボート製造産業などへの取組施策について伺います。
  - Moovvi の屋外エリアはボートレースの水面に隣接しているため、間近で迫力のあるレースを観戦できます。小さいころからボートに親しみを持っていただくことで、ボートレーサーを志すきっかけにもなるのではないかと考えております。なお、業界におけるボート製造につきましては、ヤマト発動機(株)(群馬県)が行っており、全国 24 場ともヤマト発動機(株)からボートを購入しています。
  
3. 来場者における市内外の内訳と、どのような(家族連れ・おひとり)来場者の内訳となっていますでしょうか。
  - Moovvi につきましては、LINE による事前予約のうえ来場された方の地域分布をみますと、常滑市内が 9.1% で市外が 90.9% でした(R5 実績)。市外のうち最も来場が多かったのが名古屋市の 21.9%、続いて隣の半田市 8.8% でした。また、Moovvi は保護者とお子様と一緒に過ごしいただく施設となりますので、ご両親とお子様、あるいは両親どちらかとお子様での来場が大半となっています。お盆やお正月といった帰省シーズンには 3 世代でのご来場も見受けられます。次に、Gruun につきましては、平日、スタジオプログラムの開催もあることから、市内の子育て世代やシニア世代の利用が多く、平日の夕方になりますと市内小中学生が多く集まってくる傾向にあります。また、休日のイベント開催時には、市内外から多くの方にご来場いただい

いる状況でございます。市内外の利用割合につきましては、来場者への聞き取り状況から、平日では、市内が8割、市外が2割、休日では、市内が6割、市外が4割と推測されます。

4. 市内の小中学校などを含めて、同施設においては、子ども達の教育面での活用はされていますでしょうか。
  - 両施設ともプレイリーダーという専門のスタッフが常駐しており、安心して利用できるということで、市内小学校の特別支援学級の児童に数回ご利用いただいております。また、普段は接触機会の少ない子ども同士も、プレイリーダーを介して交流が図れることから、お子様の成長を感じられるというお声もいただいております。また、高校につきましては、Gruunにおいて、筑波大学の協力のもと、常滑高校の生徒が企画・運営するイベント「放課後ボールパーク」を実施しております。イベントの内容としましては、ストラックアウト・塗り絵・シャボン玉などのブースを設置し、来場した子どもたちにスタンプラリー形式で参加してもらい、楽しんでいただいております。この他にも、Mooviでは、日本福祉大学の子ども発達学科の教授を招き、学生とともに砂遊びワークショップを実施しております。また、放課後等デイサービスや発達支援センター、民間の保育所でも外出の際に立ち寄っていただいたり、遠足としてご利用いただいております。
  
5. 「モーヴィ」は全国5か所目、「コミュニティパークグルーン」は今回が業界初の試みとのことであり、両施設とも株式会社ポーネルドとの協働事業とのことですが、背景と経緯について伺います。
  - レース場の遊休スペースの有効活用や新たなファンの獲得を目的に、BOATRAC E 振興会がポートレース場におけるパーク化を推進してきました。ポーネルドは、あそびの道具と環境を提供する事業を展開しており、このノウハウを更なる地域貢献に活用すべく、BOATRACE 振興会と協働し事業に取り組んでいます。Mooviとこなめは、子供とそれを取り巻く大人が「遊び」を出発点に集い・交流する場、または地域の幅広い層の近隣市民が利用しやすく親しまれる子育ての場として、BOATRACE 振興会から総額1億円の事業支援を受けて整備しました。Gruunとこなめは、当初は2,000㎡程度の駐車場や芝生広場の構想でした。その後、子供たちの健全な育成と子供から大人まで多世代の交流ができるコミュニティの拠点として『地域に拓かれた憩いと賑わいの空間を創出し社会貢献を推進することで、ポートレース場の活性化を図ること』を目的にした、BOATRACE 振興会からの支援活用を検討し、総額2億円の事業費支援を受けて4,000㎡のコミュニティパークとして整備しました。

6. 季節などの時期や曜日によって利用者数は変わりますが、その傾向性を伺います。
- Mooovi の1日平均利用者数につきましては、土曜日が約300人、日曜日が約400人、平日が約120人となっております。また、季節による傾向は特にありませんが、例年ゴールデンウィークやお盆、年末年始は多くの方にお越しいただいています。なお、今年度最も来場者が多かったのは、ゴールデンウィーク5/4(土)の752人でした。Gruun の1日平均利用者につきましては、隣接する Mooovi が営業している平日は約200人、営業していない平日は約100人となっております。土日祝が約1,000人となっておりますが、レース開催日には増加傾向が見られます。また、屋外でも過ごしやすい春・秋や、イベント開催の多い休日は多くの来場者にお越しいただいております。なお、今年度最も来場者が多かったのは、隣接するポート駐車場で地区の春まつりが開催された4/24(日)で、2,566人でした。
7. 子供から高齢者までが楽しく運動・談話等多目的で集える心身ともに健康になれる公園はなかなか無い公園だと感心しておりますが、ネットでの情報で申し訳ありませんが、見たところ多額の建設経費を掛けられていない様に感じておりますが、予算はどれ位だったのでしょうか。また結構な広さだと思いますが何かの跡地利用なのでしょうか。
- 常滑市 HP で公開している決算の金額をご覧になったものと考えておりますが、その金額は建築工事および付属する外構工事の金額のみの記載になっておりまして、設計、遊具設置等の金額は含まれておりません。整備事業費につきましては、モーヴィとこなめが6億900万円(その内 BOATRACE 振興会より1億円)、グリーンとこなめが4億2,800万円(同2億円)であります。また、新スタンド、モーヴィおよびグリーン建設にあたっては、敷地内の東スタンド(旧スタンド)の一部の他、下水処理施設(集中浄化槽)を解体したものであります。

### (3) 委員の所見・感想

#### ■宮原委員長

公営のポートレース場という大人向けであり下火になりつつあった地域産業に、多世代交流場を隣接したことで、両方の施設にこれまでにない客層の来場者が増えた施設であり、発想の転換と財政面での協力体制が整った成功例であると思った。

特にグリーンについては、多世代が交流できる屋外をメインとしたコミュニティ拠点として整備されており、フットサルやバスケットなどができる人工芝、エアーフットネス、DIY体験ができるワークショップスタジオがあり、気軽さと利便性にあふれた施設として非常に興味深く感じた。小中学生の新たな居場所となる存在としても大きな意義のある施設と言える。

協働事業を担当した(株)ボーンランド社としては、モーヴィは全国5か所目である

が、グルーンは全国初の取組とのことであり、当該施設の今後の利用状況が重要なデータとなることから、今後の運営には興味を持つところであろう。子どもの遊び場であり、かつ大人の癒し処となる存在感あるパークエリアとして、また定住施策にも大きな意味を持つ事業として参考となる視察となった。

#### ■渡部副委員長

Moovvi とこなめは、屋内外複合型の遊び場であり、特に子どもを対象にした施設となっているが、利用料金は子どもも大人も一律 300 円と非常にリーズナブルに設定されている。一方、Gruun とこなめは多世代が交流する地域コミュニティ拠点として機能しており、季節や自然を感じながら様々なイベントやワークショップに参加することも可能な施設となっている。これら特徴のある 2 つの施設は、地域住民の交流の場としての機能が期待できるものであり、同施設への交通手段は平日休日ともにバス運行がされており、ボートレース場の広大な駐車場も共同利用していることからアクセスはしやすいと思われる。

また、施設運営については、全国 5 カ所にて同様の施設運営実績のあるポーネルド社との協業事業を行っており、遊具や空間づくり、また同施設で開催されている各種イベントは民間ノウハウが活かされたものとなっている。

千歳市においてもこのような施設は、特に子どもを持つ世帯には喜ばれるものと思う。屋外施設については雪の関係からも維持コストとの兼ね合いはあるが、千歳市の中心市街地でも十分に設置が可能である施設と考える。

#### ■山崎委員

最初にMoovvi とこなめの施設を見せて頂き第一に感じた事は、安全に配慮した子供が楽しく安全に遊べるコンパクトな施設だと思った。しかし千歳の街に作るとしたらと考えると難しいのかなと感じた。

また次に、Gruun の施設を見せて頂き市民の利用が結構有ると伺ったが、使用目的と使用頻度がどうなのだろうかと感じた。千歳市には各コミュニティーセンターが有るので必要ないなと感じた。

#### ■五十嵐委員

近隣の方々が気軽に訪れている様子が確認できた。また、名古屋市方面からの来街者を呼び込める施設としても生かされている。

歴史の長い公営ギャンブル施設に付属する施設となるが、近年の世論から考えると千歳市に IR または公営ギャンブルが新たに出来る可能性は非常に低いと思われる。但し千歳市の現状ではそれ以外で来街者を増やせる施設の新規進出はあらゆる分野で可能性大である。その際に付属施設として「Moovvi」あるいは「Gruun」のような施設設置を義務付ける、対価として固定資産税等の減免措置、建蔽率や容積率の緩和を一定程度行う、

等の施策が実行されるので有れば、限られた財源を使用することなく設置可能だと思います。

#### ■山口委員

- ・ 当市には公営賭博の場としては競馬の場外馬券場があるが、実際に行われている会場がないことから、公営ギャンブルに対するイメージは複雑なものがあったが、実際当該施設や競艇場については市民に広く開放されており、負のイメージはなかった。
- ・ Mooovi とこなめ、コミュニティーパーク Gruun は多くの市民が、特に家族連れが多く、小中学生も学校帰りに利用するなど、市民権を得ている憩いの場であると感じた。
- ・ 当市にはこのような家族向けの施設が現在は無くなっており、似たような施設を望む市民の声が多くあることは承知している。単に福祉施設としてでは無く、観光やアミューズ性を持ち合わせた持続可能な施設の設置は必要とも考える。
- ・ 公営ギャンブルやカジノ構想に関しては一定数アレルギーを持った市民もいると思うが、実際に拝見するなかでは、市や市民にとって必要と考える持続可能な施設を誘致、又は開設するにあたっては、このような業態を取り入れて行くことも今後検討しても良いと感じる。

#### ■仲山委員

モーターボート競技は一つのギャンブルとの認識からこれまであまり興味を持ってみたことがなかった。しかし、モーターボート競技を公営企業として70年間事業を行っている自治体を視察させていただき、学びが多かったと感じた。地域としては、一つの産業であり今回の視察の目的であったコミュニティ施設を見ても地域の力が入っていて成功していることに勉強させられた。特に Mooovi の屋外施設は、遊びの道具と環境を提供する民間事業者と連携し事業推進されていて利用者のニーズを満足させる施設となっており感心した。千歳市も多くの屋外の公園が設置されているが、利用者のニーズにあった公園づくりのために民間との連携による事業展開も面白いのではないかと感じた。特に北海道は降雪があるため一年を通し遊べる遊具と環境づくりが必要ではないかと改めて思った。

#### ■吉谷委員

噴霧で体感温度下げたり衛生的環境で噴水活用できるというのは寒冷地ではない地域だからこそできるとも思いつつ、千歳市の公園や子どもの遊び場も、それくらい遊びやすいものはあっても良いと思ったため、間接的子育て支援施策提言に資するものとなった。

タワーすべり台も体感した中で、大人が乗っても滑っても壊れない高い頑丈性も確認できたので、遊具製造業者の具体的提案もしやすくなるのではと感じる。アクティブな遊具が多かったことから軽度な怪我もつきものになってくることが想定される、安全性をどう確保するかの課題もみえてきたため有意義な視察となったと思われる。

(別紙4)

## 4. 常滑市役所に掲示された「やきのもののみち常滑」を象徴した陶壁について

### (1) 説明主旨

#### ■新庁舎建設の経緯など

常滑市役所の新庁舎は、旧庁舎の老朽化と災害時の機能不足を解消するために建設された。新庁舎は、震度6強以上の地震に耐えうる設計となっており、大規模災害時には復旧・復興の拠点として機能する。2022年1月4日に業務を開始し、市民の利便性向上と職員間のコミュニケーション促進を目的としている。新庁舎は、市民病院と同一敷地内に建設され、市民病院との連携も考慮されており、市民が利用できる会議室や市民ギャラリー、こども図書館などの市民交流ゾーンが設けられている。

旧庁舎の老朽化と耐震化への対応に伴い、市民アンケートや市民会議の結果をもとに新庁舎の建設・移転が決定された。新庁舎の基本設計を策定するにあたり、市民や職員の幅広い意見を集約し、各所にそれら意見を反映した。同一敷地内にある保健センターや市民病院と連絡通路でつながっており、立体駐車場には連絡通路を整備したことで、雨に濡れることなく直接、市役所2階の正面玄関にアクセスできる。

#### ■陶壁の設置について

新庁舎建設にあたり、新庁舎正面玄関の受付背後の壁面に「やきもののみち常滑」を象徴した陶壁を制作するとともに、陶壁制作の経験者から技術や経験を若いづくり手につないでいくことを目的に「常滑市新庁舎陶壁でつなぐプロジェクト」を実施し、陶壁制作者の選定を公募型プロポーザル（企画提案）方式で行った。

プロポーザルの結果、市内居住者による陶壁制作チームが選定され、新庁舎2階入り口に、高さ7メートル、横8メートル、641枚の陶板を使った陶壁が完成した。

なお、常滑市などを放送エリアとするケーブルテレビ局「知多半島ケーブルネットワーク」が制作したドキュメンタリー番組が陶壁の制作過程を、2020年の夏から1年半に渡って取材を行い放映された。

また、新庁舎の建設にあたり「スクラッチタイル市民制作プロジェクト」を実施し、新庁舎2階エントランスと立体駐車場を結ぶ歩行者用連絡デッキの壁面に設置されるスクラッチタイルに、市民が制作に関わる機会を設けた。これは、市民の新庁舎への愛着を育み、永く親しんでいただきたいという思いから企画された。結果、縦2.5メートル×横18メートルの壁面には、1,640名の市民により制作された1,628枚タイルが設置され、それぞれのスクラッチタイルには、制作者である市民のメッセージなどが彫られている。

新庁舎に建設にあたっては、陶壁やスクラッチタイルの新設を行うと共に、旧庁舎において使用されていた陶壁や陶器についても新庁舎への移設を行った。

## (2) 主な質疑応答

1. 新庁舎建設への市民意見集約や市民の声が建設へ活かされた箇所について。また、新庁舎開庁後に利用される市民からの声について。

- **【市民意見の集約】** 市庁舎の今後のあり方（耐震工事を行うか、新築建替えを行うか、市庁舎はどうか）について、市民の目線であらゆる観点から検討するため、公募の18名と無作為で抽出した1,000名の方に参加を依頼し、承諾いただいた28名の方、計46名の市民を構成員とした「市庁舎の今後のあり方を考える市民会議」を合計5回開催しました。この会議の結果、高台への新築移転を望む意見が約9割となったため、市民会議後に実施したアンケート調査とあわせて、これらの市民意見を反映した基本構想の案を策定し、「市民の安全・安心のためには高台移転が必要」とすることを庁舎の今後のあり方に関する基本方針としました。
- **【市民の声】** こども図書室及び授乳室の設計にあたり、子育て世代の意見を取り入れるため、市民によるワークショップを実施し、集約した意見を以下のとおり反映しました。閉庁日でも開館できるように、セキュリティ区画の設定を行い、土日祝日の開館に対応可能とした。靴を脱ぐ絵本コーナーのスペースを広くし、床暖房を導入。絵本架は最上段に平置きできるものを採用し、入口付近には展示台を配置。カウンターや家具の配置などについて、市民意見を反映して決定。こども図書室の隣に授乳室を配置し、室内に鍵付きの授乳スペース、粉ミルク用の調乳器、おむつ交換台及びおむつ用のゴミ箱を設置。最寄りのトイレに子ども用の便器を設置
- **【開庁後の利用者からの声】** 来庁者からは、「よく利用する窓口がワンフロアにあり、関連した部署が近接した位置に配置されていてわかりやすい」とのお声をいただいております。

2. フリーアドレス化したことによる業務効率などに対する効果について

- フリーアドレスに対応できる設計としましたが、現時点では実施しておりません。なお、新庁舎ではユニバーサルレイアウトを採用し、課長級の座席を独立席ではなく島の中に配置し、部署間の境目を明確に定めなかったこととしました。この効果として、人事異動等の人員の増減にも柔軟に対応でき、対面する職員が他部署の職員になることもあるので、自然と会話が増え、職場の風通しがよくなったと感じています。

3. 新築移転の総額について

- 新庁舎移転の総額は、立体駐車場、こども図書室、移転関連費等を含み7,315,000千円でした。なお、新庁舎建設の財源については、財政負担を軽減するため、津波対策のための防災・減災など特定の事業に対する資金借入制度であり、その借

入 額の 70%が国から地方交付税措置される「緊急防災・減災事業債」を最大限有効活用しました。その他にも、太陽光発電設備やコージェネレーション設備の導入には「二酸化炭素排出抑制対策事業費補助金」を活用するだけでなく、借入額の 50%が交付税措置される「防災・減災・国土強靱化緊急対策事業債」を組み合わせることで財政負担の軽減を図りました。

4. 市民病院との隣接、立体駐車場とのアクセス、時代に合わせた設備など市民の利便性向上に優れた作りになっているが、特に市民に喜ばれている点など 特徴的な機能について
  - 市民窓口課に来庁者が申請書に記入せずに、各種証明書の発行や住民異動 届などの手続きができる窓口システムである「書かない窓口」を導入しました。このシステムは、窓口における申請書類作成の際に、タブレット端末から入力した情報と本人確認書類の IC から読み取ったデータ等を活用することで、手続きが簡略化されるものです。来庁者からは「記載作業が減って良い」などのご意見をいただくことが多く、また職員側の意見も「来庁者の情報を確認しながら手続きを受付できるため、適切な処理をしやすい」など好評であるほか、聴取りを行うことにより、来庁者との意思疎通を図りやすい等の効果も実感しています。
5. プロジェクトを開始するにあたり、こうした取り組みは、該当地域の住民や企業が積極的に盛り上げる意思や活動が先にある、行政に提案して進めていくという住民提案型のものであることがあり、本プロジェクトもそうした流れで始まったのではないかと考えますが、企画提案は住民側からであったか、行政からであったかお伺いします
  - 当該エリアにおける活性化の必要性について、行政と住民が課題を共有していた。中心市街地活性化に関する法律に基づき「長崎市中心市街地活性化基本計画」と「都市再生整備計画」などの活用を行政側が整備したことにより、本プロジェクトがスタートした。
6. 新大工エリアの空き店舗活用について、空き店舗が平成 25 年時点でエリアにどのくらいあり、その後どういった活用を進めてきたか、変遷や現状についてお伺いします
  - 空き店舗については常に入出店による変動もあったことから、一定時点での空き店舗数は把握しておりません。当該エリアについては、平成 25 年から新大工町地区市街地再開発事業による居住と商業機能の拡充が図られました。また、電停バリアフリー化などによるエリア内のバリアフリー化を推進しました。
7. 国内有数の観光地において、高名な観光施設（平和公園など）が必ずしも含まれているわけではない当プロジェクトが地域住民を対象としているのか、来街者なのか、インバウンドなのか？
  - 全てが対象である。特に 400 年以上の歴史がある「軸」を中心に据えたプロジェ

クトから長崎市の歴史や生活を感じ取っていただきたいとのこと。

### (3) 委員の所見・感想

#### ■宮原委員長

常滑市は窯業が主産業であり、日本六大窯のひとつとされ、最も古く最大規模の焼き物の産地として歴史を刻むまちである通り、まちのあちこちに、大小さまざまな招き猫の像が見られたのがとても印象的であった。

その特徴を活かしつつ、災害時の安全確保と市民や職員の利便性を追求した形で新築移転した市庁舎を、とても興味深く視察することができた。

市民の利用頻度が高い窓口をワンフロアに集約した点や、隣接する市民病院、保健センター、立体駐車場が一体的に繋がる配置など、利用者に配慮された作りになっていたことも大きな特徴であった。またフリーアドレスが意識されたフロアのつくりと配席については、実際に拝見し、いわゆる市役所の印象が変わるような斬新さがあり、職員にとっても風通しの良いものになっているということで大きな参考になった。

千歳市の市庁舎においては、特に本庁舎や議会棟については相応の対応も今後必要になってくることから、この視察を参考にしていきたい。

#### ■渡部副委員長

常滑市役所の新庁舎における陶器の活用は、その地域が長い歴史を持つ陶磁器の産地であることから、文化的アイデンティティを反映するとともに、実際現地を視察したことからも建築物としての美的価値を高める効果があると感じた。

現地を案内してくださった新庁舎建設に携わった職員（技術職）からは、陶器は耐久性が高く、長期間にわたってその美しさを保つことができるため、建築材料としての有効性が認められているとのことであった。確かに建築材料としても理にかなっているのであろうが、陶器を用いることで、建物に独特の質感と温かみを与え、訪れる人々に心地よい空間を提供することができているのではないだろうか。

さらに、地元産業を活用することで、間接的にでも将来にわたり経済的利益を地域に還元し、地域経済の活性化にも寄与するものと考えている。このように、常滑市役所の新庁舎に陶器を使用することは、多方面にわたる有効性を持っていると言える。

また、巨大陶壁やエントランスのスクラッチタイルの設置に際しては、市民参加型の事業を積極的に行なったことから、市民にとって愛着のある新庁舎となっているものと考えている。本市においては、今後、公共施設を設置する際にどのようなものを取り入れることが、市民から愛される施設へとつながるか参考となる視察となった。

## ■山崎委員

当初議場に案内して頂いて驚いたのは、理事者席と議員席が円形に配置されていた事でした。場合によっては隣同士で質疑答弁のやり取りをするケースが出て来てやり難いだろうと感じた。モニター映像が常に流されるシステムになっていたのは有効と感じた。

庁舎内の視認については配置がワンフロアに部長以下が居て各級職員のコミュニケーションが取り易くて良いだろうと感じ、将来千歳市に庁舎の建て替えが有るならば個室性はやめたワンフロア性が業務の効率化に繋がると感じた。

庁舎玄関外の壁、庁舎に入って直ぐの壁面が焼き物でできており、また応接室に並べられた焼き物を見て、流石に焼き物の街だなと感じた。

## ■五十嵐委員

機能面が素晴らしかった。説明していただいた担当者はゼネコン出身とお聞きしました。近年、職員の採用で技術系の新規・中途採用がなかなか増えないと伺っております。一般職員と条件面で差がついたとして優秀な技術系職員が増えると市民にとってわかり易い行政サービス向上が実現できると実感した。

当市の職員採用において技術系だけでなく各種分野のエキスパートを採用する取組に真剣に取り組むべきと思います。700人の職員が皆ゼネラリストである必要は全く無いと思います。

## ■山口委員

- ・ 常滑市は窯業が伝統産業であり、常滑焼は日本六古窯の一つに数えられ、この中でも最も古く最も規模が大きい。特に招き猫の焼き物については全国シェアの70%ほどに上る。印象的だったのはマチを挙げての招き猫押しである。市内至る所に招き猫で埋め尽くされており、市役所の内外部においても招き猫がモチーフされており圧巻である。議場の中の議長席の横にも市議会と書かれた小判を持つ招き猫配置されており、否が応でも常滑市＝招き猫の印象がすり込まれる。マチのシンボルチックなものを来訪者に対ししっかりと印象付けることは観光施策としても有益であり、参考になった。
- ・ また、市役所へ続く通路には市民が作ったスクラッチタイルを配置した壁があり、市役所入り口にも大きな常滑焼きの巨大陶壁が配置されるなど、地域の伝統工芸に関してかなり力をいれているのが分かる。
- ・ 伝統工芸に携わる後継者育成についても手厚く支援を行っており、大事に且つ脈々と途切れること無く受けつなげられていると説明を受けた。その伝統工芸を町の魅力として町にエリアを設けてアドベンチャートラベルの手法が用いられている。本市における伝統文化、又は今後も受け継いで行くべき産業は何かを考

えさせられる。

- ・ 本市に於いての魅力は空港や支笏湖、チップ、パレットの丘、自衛隊など多数あるがどれも、反面フォーカスがあたりにくくぼやけてしまっているように感じる。ターゲットを絞るかそれぞれを組みあせた新たなものを作り出すか、イメージ戦略という点において再考すべきと考える。また、フィルムコミッションとして多くの撮影現場としても活用されている。マチの多くの魅力をクローズアップさせ、周遊できる環境作りは、観光客の回遊性を高めることに有益であると感じた。

## ■仲山委員

市民・市職員の安全・安心のための市役所庁舎建設へ「市庁舎の今後のあり方を考える市民会議」を開催し多くの方の声が反映された市庁舎であると感じた。防災面では津波被害等を防ぐため高台地域への移転や病院機能や消防機能が周辺にあり災害リスクへの備えがされ、被災時の行政機能の維持等が図られていると思った。また、市役所利用者へ寄り添った市民窓口の配置や職員の移動動線にも工夫を感じた。さらに地域の産業の一つであり千年を超える焼き物文化がある「常滑焼」を用いた陶壁を制作し、経験豊富なつくり手から若いつくり手へ技術をつなぐ技術継承の機会とされたことに地元産業振興への強い思いを感じた。千歳市の本庁舎も耐震化は図られているものの水廻りを含め老朽化が懸念され、いずれ建て替えなどの議論にもなって来ると思う。その際などに今回の視察で学んだことを活かしていきたい。

## ■吉谷委員

庁舎増設が良いのか全面建て替えや移設新築が良いのかという点について将来性のことを考えた際に、費用かけてでも全面的な建て替えや移設新築の方が住民にとってもメリットが大きいのではないかと感じるものであり、市の予算(市民から集めた税金含む)の使い方うるさい立場の者としても考えを一考するものであった。

吹き抜けフロアにし、床穴式空調にしたことで空調効率が結果的に上がった建物構成は良いと感じたし、見渡せる・縦割り行政になりにくいように仕切りや壁減らす、住民が利用しやすいようになっているラウンド型窓口等も風通しの良い役所のイメージが伝わりやすく住民配慮が届いていると思うもので参考となった。

何より、立体駐車場になっていることで、住民も活用して尚面積的余裕がでるため、職員も車通勤しやすく就労環境改善につながっている点も参考になるものであった。

(別紙5)

## 5. 自治会主催エリアマネジメント「7町・広域連合会」について

### (1) 説明主旨

岡崎市における「7町・広域連合会」は、地域コミュニティの活性化と地域課題の解決を目的とした自治会の連合体である。この組織は、地域の住民や事業者、市民団体、行政職員が協力し合い、30～40代を中心に次世代の地域リーダーを育成することを目指している。具体的な活動としては、空き家問題の解決、高齢者の生活支援、地域イベントの開催や支援、SDGs関連の取り組み、子育て支援、まちの景観改善など、多岐にわたるプロジェクトを推進している。また、地域の価値を高めるためのまちづくり会社「株式会社Q-NEXT」の設立にも関与しており、新しい価値の創出をビジョンに掲げている。

「7町・広域連合会」は、岡崎市の中心市街地である康生地区を中心に活動しており、この地区は東海道の宿場町や岡崎城の城下町としての歴史を持ち、商売と人の交流が盛んな地域として知られている。連合会の活動は、この歴史的背景を尊重しつつ、現代のニーズに合わせた地域づくりを目指しており、地域の伝統と新しい動きが融合することで、より魅力的なコミュニティが形成されていくことを期待している。

さらに、「7町・広域連合会」は、地域の公共空間や不動産の有効活用を推進しており、公園やレンタルスペースなどの場所を活用したレクチャーやまち歩きイベントを通じて、地域の魅力を発信しており、これらの活動は、地域住民だけでなく、訪れる人々にも岡崎市の文化や歴史を体験する機会を提供している。

このような地域主導の取り組みは、公益財団法人日本デザイン振興会による2023年度のグッドデザイン賞において、グッドデザイン金賞を受賞するなど、その努力が認められている。この受賞は、地域が一丸となって取り組んだ結果であり、今後の活動にも大きな励みとなっている。

### (2) 主な質疑応答

1. 地方の地域が抱える課題解決や魅力向上へのプロジェクト事業で多くの街での懸案事項であり、一つの成功例でありご苦労も多かったと考えます。このプロジェクトへの関りを持って行動された世代別の人員や事業の成果についてお伺いします。

▶次世代の会は、幹事会という形で次世代の会の中心メンバーを作っています。やはり中心になるべきメンバーの30代40代がいないと、上の世代(50～60代)や下の世代(20～高校生代)へ繋がってやり取りができないのではないかというのが、私たちの動いていく中での実証性ということです。この会はプラットフォーム組織で登録制ではありません。分科会のリーダーというのが、基本的には自主的に行動している。会議には80人集りますけど自主的に働いているのは多分20人ぐらいかなという

ころです。事業の効果はニーズにあった公園再整備により人の往来増や 30 年ぶりに復活した盆踊り、空き店舗減などに繋がっている。

2. まちづくり会社の設立に至るまでどのような課題があり、それを解決したでしょうか。
  - 設立資金をどのように集めるかは課題があった。当初は株主制のような形にしようとも考えたが、最初から大きな事業があるわけではなかったので、出資を集めるようなことにはならなかった。結果、設立時の中心メンバーでお金を出し合った形となった。
  
3. 現在の行政との関りについて、特に財政面において具体的支援はありますか。
  - 本連合体は、QURUWA 戦略の伴走窓口として、プロジェクトが持ち出した案に対して調整をするキーマンとなる。定例会にも参加し情報共有も行う。行政と財政面での関わりはない。補助金を獲得するための活動をしているわけではなく、また、自分たちの活動の自由面を確保するといった観点からも財政面の支援は求めてはいない。行政からの事業受託はしているが、あくまでも当団体の活動主旨にあったものだけを受託している。
  
4. 自治会×事業者×行政の公民連携ですが、具体的な役割分担などはあるのか伺います。
  - 行政には活動支援をしていただいております、行政の仕組みを教えていただく、また、知識・知恵を借りている関係。そこに本連合会が入り、各自治会や事業者をつなげている。
  
5. 立ち上げにおいてのきっかけについて伺います。
  - 説明主旨のとおり。
  
6. チャーターメンバーの構成と関わりについて伺います。
  - 事務局を担当する筒井氏、元市役所 OB の安藤氏など、現在も本連合会のメンバーとして活動しており、チャーターメンバーから現在の活動メンバーの獲得につながってきた。
  
7. 事業出店者と TMO との関わりについて伺います。
  - 実際はそこまでの関りが無い。情報共有などで、ゆるやかに繋がっている関係ではないか。

8. ステークホルダーとの関わりについて、どのような課題があり、克服したのか伺います。

➤ 不動産の紹介などで関わっている。まだ事例としては多くないのが課題。

9. 資金面での課題について伺います。

➤ 給与の発生などがなく活動した分の実費だけ支出があるので、そこまで資金面の課題はない。

10. 街のにぎわい・活性化で大事なことはなにかについて（当日追加質問）

➤ 住民が主体となって取り組むこと、目先の利益主体や行政主体でやるとうまくいかないこと。街づくりに資する事業も、提案者から何がしたいのか、どうしたいのかを聞いて仲介する苦勞踏まえ、できることとやっていいこととやってはいけないことをきちんと話し合っていくことが大切。

#### （4）委員の所見・感想

##### ■宮原委員長

課題があった地域の周辺町内会が連合して組織体をつくり、まちづくりを真剣に検討する形態は、町内会が衰退化している現代においては、まさに目指すべき姿であるといえる。特に自治運営の高齢化と担い手不足の課題解決のために発足された「次世代の会」は、誰でも参加できるプラットフォームであり、多種多様な人が集まることでコミュニティのすそ野を広げるとともに高齢化問題に対応する、理想的な姿であると感じた。まちづくり会社である(株)Q-NEXTが法人格をもち契約関係等を受け持っているが、エリア価値を高める各種活動を行うなど、まちづくりの先頭に立っていることも大きいと感じた。

月1回の定例会では、住民・民間事業者、学生、行政、議員などが集まるとのことで、その層の厚さにも感嘆するところだが、集まった人同士、必ず人の顔を見て進めることで人と人との信頼関係を築いているという点は大変興味深かった。また行政との調整についても、まずは肯定から始まるという姿勢は、建設的な意見交換に繋がる大切な姿勢であると感じた。

研修の後半は、実際にまちなかを徒歩により散策を行ったが、まちの特徴や住民の希望を活かした公園や人道橋など、そこにいたいと思わせる工夫に感動を覚えた。

視察研修を通じていつも感じることは、先進的な結果を出している地域には、必ず真剣で熱い志を持つ人間がいるということである。今回もそれに違わず、大変参考になる研修であった。

## ■渡部副委員長

岡崎市が2023年にグッドデザイン賞を受賞した理由として、「QURUWA 戦略」の革新性があり、この戦略が7町・広域連合会を中心とした公民連携まちづくりとして評価されたことによるものである。岡崎市の中心市街地の主要街路と川辺を結び再生させる都市戦略として、公園・緑道・河川敷など公共空間の改修を行う「大きなリノベーション」と、地域や民間による主体的な活動や空間づくりを促す「小さなリノベーション」の両方が、市民の居場所を創出し、公と民が協働することで創造性が発揮されている点は、今回の現地視察により強く実感した。

公共空間を活用し、民間活力を引き込むことで、まちの活性化を図ることができているが、これは7町・広域連合会の中心メンバーとして奔走している若者の力が大きい。

本市においても中心市街地のあり方について検討が進んでいるが、今回の視察で学んだまちづくりの手法は大いに参考となった。

## ■山崎委員

資料を頂いて先ず驚きと感心した事は、岡崎市の自治会加入率は90%と記載されていた事であり説明の後に何か特別な加入促進活動をされたのか聞いてみると、特別この事については何もしておらず昔からこれ位の加入率と伺いまたまた感心した。

中央緑道を基盤に商店街を含めた街の活性化の為に地域の人が立ち上がり真剣に考えて自治会連合が結成され、月に1度、地域・事業者・行政が参加する定例会が行われていると聞き感心するばかりでした。千歳市もグリーンベルトを中心に賑わい創出を考えているならば、もう少し空き店舗オーナー・地域・商店街組合連合会・行政での会議を積極的に開催しなければ何も進まないと感じた。

## ■五十嵐委員

当市ではグリーンベルトを核とした「ちとせ未来ビジョン」に取り組み始めたが、やはり地域の民間商業者に委ねる事が成功への必要条件だと強く感じた。

生活者である地域の商業者が主体にならなければ絶対に成功できない実例で、以前に視察した香川県高松市丸亀商店街も同様である。行政主導ではここまで大胆な開発行為は無理だと断言できる。その一例が公共スペースにあえて大きな段を設けている点、公園が個店の入口になっている点等である。行政主体の公共スペースのリニューアルではバリアフリーの観点から難しい部分だと思います。是非とも担当者には岡崎市の実例を見学に行って頂きたいと思います。

## ■山口委員

- ・ 先ずは自治会の加入率が 90%以上と言うことに驚いた。
- ・ そこには QURUWA7 町広域連合会を立ち上げ年代別に戦略を立てて、必要なソースを年代別に引き出す手法が取られており、若い方々の新たな発想であり、有効なものだと感じる。
- ・ 次世代の会を作り自らまちづくり会社 Q-NEXT を設立。この Q-NEXT はボランティアでは無く、しっかりと利益を生み出すことも目標としており、それが組織を持続可能なものとしているとも考えられる。
- ・ 事業リノベーションスクール等も定期的に行い、次世代の起業家も育て、マチに必要な新たな風を生み出す手法が成功している例は珍しい。
- ・ KAGOTA PARK など、公園を利用する取り組みは本市でも行われつつあるが、切り口が根本的に違う。本市は市が主導して拠点地域を設定しているが、そこには起業家が入り込む余地は少ない。Q-NEXT が考えるエリアは、起業しやすさや人の集まりやすさを中心に考えられている故、自己で起業したい人が集まりやすい。集まりにくい場所をどうにかして賑わいを出すのでは無く、人が集まり起業しやすい場所にする事により、事業社が持続的に営業できる仕組みを考えている。
- ・ その最たる取り組みが乙川リバーフロント地区公民連携まちづくり基本計画 QURUWA 戦略だ。内容的にはターゲットが明確に示され、刊行物の発刊も定期的に行い、飽きさせない仕組みや、ブランディング&情報発信に対して IT も駆使しており、正に若い人の情熱と馬力が垣間見れる内容となっている。
- ・ 様々なまちづくり会社や取り組みを拝見してきたが、行政主導で上手くいった例はほとんど見たことが無い。いつもまちづくり会社の視察に行くと書き記すが、場所や資金も大切であるが、一番はそのプロジェクトに携わる人の情熱とやる気、楽しさだと思う。勿論そこには資金繰りやひとを巻き込む仕掛けの必要だが、他人事では無く、自分事としてどれだけの人が熱を帯び携われるかだと改めて感じた。Q-NEXT の若い代表や役員はこの仕事が面白いと語っていた。また、夢があるとも語っていた。そして仕事にならない事業はやらないとも語っていた。はっきりと明確な成功への指針だとも感じた。今、本市のマチ作りに必要な要素を改めて感じると共に、本市の現在の取り組みに対し、警鐘を鳴らしたいと感じた。

## ■仲山委員

地方都市の人口減少による中心市街地の衰退という課題に対し、公民連携での成功事例の行政視察ができ勉強になり、岡崎市の自治会加入率 90%以上には驚かされた。「7 町・広域連合会」・「次世代の会」は任意団体であるが、今事業における役割は非常に大きく「まちをなんとかしたい」と考え行動する人材がいたことにより課題解決へ地域が一体となるよう推進されたことで成功に繋がっていた。現地のまち歩きでは、QURUWA をつなぐ乙川に架かる 2020 年 3 月に開通した「桜城橋」を渡りましたが、

床板や手すりは岡崎市産ヒノキで装飾され、木のぬくもりを感じられ休憩スペースも設けられており大変きれいでおしゃれな橋（歩行者空間）でした。説明者によるとこの橋の清掃は、市民がボランティア清掃を行っていることもお聞きし市民に愛着のある橋になっており、まちの再生にかける意気込みを感じ、民間主導での事業の重要性を学んだ。千歳市においてもグリーンベルト周辺の中心市街地活性化へ事業推進をされており、今視察を通し地域の幅広い世代との意見交換を通し地域の多くの市民に愛着を持っていただく事業推進がこれまで以上に重要であると考えさせられる機会となり活動に活かしていきたい。

## ■吉谷委員

中心市街地やグリーンベルトを活用したエリアマネジメントを現状進めている千歳市において、行政がやるべきことを示した見本であると感じたし、自分の住んでいる地域を今後どうしたいのかについては住んでいる住民が声あげて動かないと進んでいかないことの再認識をした。

そうした中で、住民と行政と場を中継して間に入る緩衝材的役割を果たすまちづくり会社等があることのメリットも理解できるものであったと感じる。

千歳市の青葉公園やグリーンベルト、川沿いのエリア活用の今後において、その近隣に住む方の意向や要望をどう反映させて住む方も納得できそうな良い方向に持っていけるのかという部分に関し、住民も行政も方向性がバラバラというべきか、双方一方通行みたいな状況になっていると感じるところもあるため、そこを変えていけるヒントになるものと思う良い視察であった。